

## ロディニアの分裂とシベリア・クラトン南西縁褶曲帯

The breakup of Rodinia and the fold belts along the SW Siberis craton

# 渡辺 暉夫 [1]

# Teruo Watanabe [1]

[1] 北大・理・地球惑星

[1] Earth and Planetary Sci., Hokkaido Univ.

シベリア・クラトン南西縁の褶曲帯の地質をレビューし、リフトから付加体への転換がサヤン山地にみられることを述べた。

古アジア海の進化とシベリア/ユーラシアの成長はシベリア・クラトン西南縁の褶曲帯の地質に記録されている。年代論の曖昧さは詳しい解析を阻んでいるが、サヤン山地はRipheanのリフト性火山岩が東部に、西部にはMORB,OIB,ARC VOLCANICSの混在地域が見られ、リフトから付加体までの変化が追跡できる地域である。クラスノヤルスク南方のサヤン山地西部のマナ川沿いのベレーチ地域のリフト帯と言われる地域は最近の岩石化学の研究で海洋と島弧のMIXED ZONEと考えられるようになったのである（成果は別途、東工大の太田・宇都宮・石川とロシアの研究者の連名によって報告する予定である）。我々の地質調査では枕状溶岩のほとんどが逆転している。こうして、化石年代からリフェアンとされた石灰岩の下位にあったはずの苦鉄質火山岩類の年代論の根拠はなくなってしまった。苦鉄質火山岩類からは新しく、約770Maの全岩-鉱物のRb-Sr見かけ年代を得ている（Watanabe et al., in press）。これは石灰岩と同年代である。サヤン山地東部ではPROTEROZOICのGRANULITE類を貫いて平行岩脈群が発達する。地質学的関係から、この岩脈の活動時期はVENDIANである。中部サヤン山地ではRIPHEANの地層を貫くアルカリ岩の活動がある。

サヤン山地の先カンブリア系を概観すると、NEOPROTEROZOICに岩脈の貫入した地塊（ロディニアの一部）、リフト、付加体と島弧の混合地帯が区分出来る。